

不破高校朝読通信 第15号

平成26年1月8日（水）

発行 岐阜県立不破高等学校図書部

クラス別・個人別 図書貸出冊数 ベスト1 ベスト2

月	種 類	ベスト1	ベスト2
11月	総合貸出冊数	3年3組	2年2組
	朝読書用学級文庫貸出冊数	該当なし	該当なし
	個人貸出冊数	3年3組	2年2組

紹介する本

題 『英語習得の「常識」「非常識」』

編著者 白畑知彦（しらはたともひこ）

著 者 若林茂則（わかばやししげのり）

須田孝司（すだこうじ）

発行者 鈴木一行

発行所 株式会社大修館書店

発 行 2004年12月1日 初版第1刷

2007年9月1日 第4刷

定 価 1,700円＋税

図書館で購入予定

英語科教諭 橋詰 謙太郎

「私は海外を旅行したい」

「海外の大学へ留学したい」

「外国人の友達を作りたい」

「海外ドラマや映画を字幕なしで見たい」

このような希望を、皆さんも少なからず持っているのではないのでしょうか。皆さんは、「1日数分聞き流すだけで英語が話せるようになる」といったような甘い誘い文句を載せた広告を見たことはないのでしょうか。このような広告を目にした時、専門的な知識もない人たちの中には、この教材を購入すれば、「本当に話せるようになるのではないか。」というような、はかない期待をしてしまう人もいると思います。しかし、本当に聞き流すだけでネイティブのように英語がペラペラになるのでしょうか？

このような説を、「第二言語習得」の著名な研究者が、真実なのかどうかを過去の第二言語習得研究のデータを基に検証している本が、今日私が紹介する『英語習得の「常識」「非常識」』です。ここで、本に書いてある検証の一部を私の言葉にまとめて簡潔に紹介したいと思います。

この主張の根拠は、「乳幼児は、母語を机に向かって勉強するといった訓練を経て習得したわけではなく、ことばを聞いて覚えてきたわけだから、大人も同じように、いつも聞いてさえいれば、乳幼児と同じように話せるようになるのである。」というものです。

しかし、乳幼児と私たちの日常で与えられるインプット（英語を聞くこと）の時間には、雲泥の差があることが指摘されています。乳幼児が母語を習得する4年間で与えられるインプットの量は17,520時間ですが、私たちが1日1時間休まず6年間英語を聞き流しても2,190時間にしかありません。前者と後者を比べても、圧倒的な差が見られます。

では、小学生/中学生/高校生となった私たちが、インプットの量を増やしたらどうでしょうか。それについても、イマージョン教育（学校生活ではすべての教科を第二言語で行う教育）の研究を基に検証されています。結果、イマージョン教育を受けた生徒は第二言語を使ってよく話し、リスニングテストでは母語話者と同レベルの成績を収めたと報告されていますが、問題点もあるようです。例えば、文法能力の不完全性や、社会言語学的能力（場面によって、どのような言葉遣いが適切であるか判断する能力）が欠けているといったことです。つまり、文法を暗示的に教えられていないため、文法的な誤りが多く、適切な表現を話すことができないという結果になったと考えられます。

よって、「1日数分聞くだけで、乳幼児と同じように英語が習得できる」という主張は疑わしいのです。

スペースの都合上紹介できませんでしたが、さらにインプットの質にも関連付けて検証しています。例えば、「インプットの質と速度の関係」にも触れており、「2倍速を聞けば、ナチュラルスピードに戻った時に、聞き取りやすくなる」という説についても、科学的根拠を基に検証しています。

以上のように、英語学習に関する様々な説を、第二言語習得研究者が科学的根拠を基に検証したのがこの本の特徴です。以下に検証されている疑問をいくつか載せておきましたので、興味のある人は、ぜひ読んでみてください。きっと、自分の英語学習に役立つヒントが隠されているのではないかと思いますよ。

「母語は模倣によって習得する」のか？

「教科書で習った順番に覚えていく」のか？

「外国語学習は音声から導入されるべき」か？

「多読で英語力は伸びる」のか？

「教師が誤りを直すと効果がある」のか？

「頭のいい人のほうが外国語学習で有利」なのか？

「言語学習においては女性のほうが男性よりも優れている」のか？

「第二言語学習は幼少期から始めないと遅すぎる」のか？

「英語耳や日本語耳という区別はある」のか？

「英語は右脳で学習する」のか？